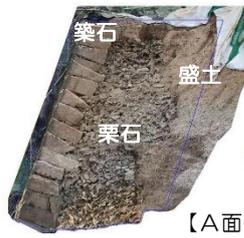


丸亀城管理室だより № 11

三の丸D面地中部から不規則な石垣が出現

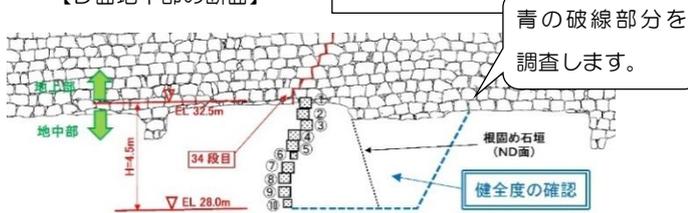


【D面地中部の断面】



【A面石垣の断面】

築石が規則的に連なり、背後に栗石、盛土があるA面石垣(上)に対し、D面地中部(左)は、築石が不規則で不安定な石垣です。



青の破線部分を調査します。

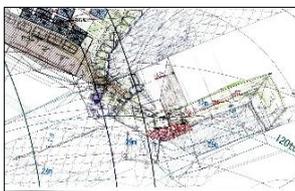
三の丸D面の地中部から不規則な石垣が出てきました。石垣は「築石」「栗石」「背面地盤（盛土）」の三層からなる柔構造ですが、D面地中部の石垣は築石が不規則な状態で盛土中にありました。

このような状態のままでは将来の石垣積み直しの際に弱部を残すことになります。そこで、D面南側で試験掘削をおこない、地中部の石垣の健全さを調査し、解体ラインの追加が必要かどうかを判断します。

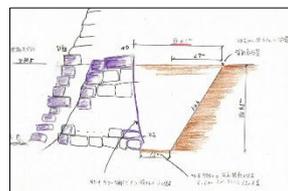
2度と崩れない石垣に復旧するために、関係者一同、力を合わせて頑張ります。

掘削図面ができるまで

下の図は、三の丸D面地中部の掘削をどのようにおこなうか検討する際に作成した手書きの図面です。これまでの調査で確認されている埋没石垣の状態を考慮しながら作成しました。刻一刻と変わる現場に対応するため作成されたスケッチには、担当者の知恵と工夫が詰まっています。



【平面図】



【断面図】

華麗なる作業足場

石垣復旧工事に欠かせないものに、足場の組み立てがあります。場所や内容にあわせて、安全に効率よく作業ができるよう、足場を組みます。

足場を組む職人さんは、「鳶（とび）職人」という高所作業に携わる専門職で、現場には欠かせない存在です。工事の進ちょくに応じて変化する足場にも注目してみてください。



熱中症対策

朝夕は涼しくなりましたが、日中は、まだまだ暑い日が続きます。石垣復旧工事現場においても、熱中症防止対策をおこない、体調管理に努めながら工事を進めています。

強い日差しの中、頑張ってください工事関係者の皆さんに感謝！！です。



熱中症予防を呼びかける看板、日差しを避ける日陰スペース。屋外用ミスト扇風機の使用やファン付きの作業服を着て、暑さ対策をしています。

石垣解体からわかったこと



【平成 30 年の崩落後写真（上）と現在の工事現場写真（下）】



帯曲輪の掘削に伴い、三の丸地中部の複雑な構造がわかってきました。櫓台の地中石垣や根詰め石垣の存在、帯曲輪石垣のG面は、三の丸石垣のA面に向かって延びていることがわかりました。



【正保城絵図 正保 2 年】



【山崎時代 丸亀城郭絵図 万治元年】

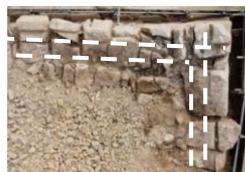
上図左の【正保城絵図】に描かれているのが、今の帯曲輪 H 面、I 面です。この段階では三の丸坤櫓石垣は直線だけですので、未着手と思われます。

上図右の万治元年の山崎時代の【丸亀城郭絵図】には、帯曲輪が築かれ、三の丸坤櫓石垣も完成しています。G 面が A 面まで延びていたことから、三の丸坤櫓石垣を築くにあたり、帯曲輪石垣 G 面、H 面を築いた後、F 面を築きながら北に向かって拡幅がおこなわれたと考えています。

胴木再び

解体中のBC面29段目から胴木を検出しました。この段を構成する築石のすべてに溝状の加工痕があり、木片、木皮が残っていました。

胴木は湿潤な地盤の根石下部に設けられ、主には上に乗る石垣石材の沈下を防ぐ目的で使用されますが、三の丸のような、高く乾燥した場所での使用は珍しく、石垣の中から見つかった事例はありません。胴木は伝統工法の一つで、三の丸の「埋没石垣 1」附近からも胴木が検出されていたことから、石垣の修復がこの場所でおこなわれた根拠とも考えています。石垣途中の築石に胴木を敷くための加工を施し、石垣面を整えたと思われ、当時の築き直しへの意気込みが感じられます。



【胴木敷設イメージ】



【石材の加工痕】



上段の築石が割れ、胴木が朽ちてできた隙間に落ちていました。

胴木は白い点線の段で見つかりました。



手で触るとボロボロと崩れます。

何匹いるかな？

大手二の門前の「ときわ橋」からお堀をのぞくとカメが甲羅干しする姿が見られます。

カメの甲羅の下には毛細血管があり、甲羅干しをすることで血液の循環がよくなり、効率よく体を温めることができます。また、太陽の光を受けて成長にかかわるビタミンDを合成したり、体の雑菌を追い払い、病気を防ぐ効果があります。

甲羅干しはカメにとって一番の健康法ですね。



※答え：写真に写っているのは、カメ 12 匹、スッポン 1 匹です。

作成：丸亀市教育委員会 文化財保存活用課
丸亀城管理室 TEL0877-23-2107